

女子美術大学大学院 博士前期課程  
インタラクティブ空間演習 2016後期

批評理論について 1  
～ 非インタラクティブな「テキスト主義」の系譜  
( 第11 回：2016-12-14 )

担当： 石井 拓洋  
takuyo.ishii@gmail.com

2016

# 藝術文化研究のための「視点」の設定

- ・ 藝術文化研究での 基本的視座

「20世紀の 知の 最大の変革 は、  
物事を『実体』ではなく、『関係』として認識しようとすることです」

( 小林康夫、船曳建夫編 『知の技法』 1994年、102頁。 )

実体論 から 関係論 へ  
substantialism relationalism

〈関係論〉をみちびいた契機としての  
〈言語論的転回〉について

1900年ごろまでの言語観

ソシュール以前の考え方

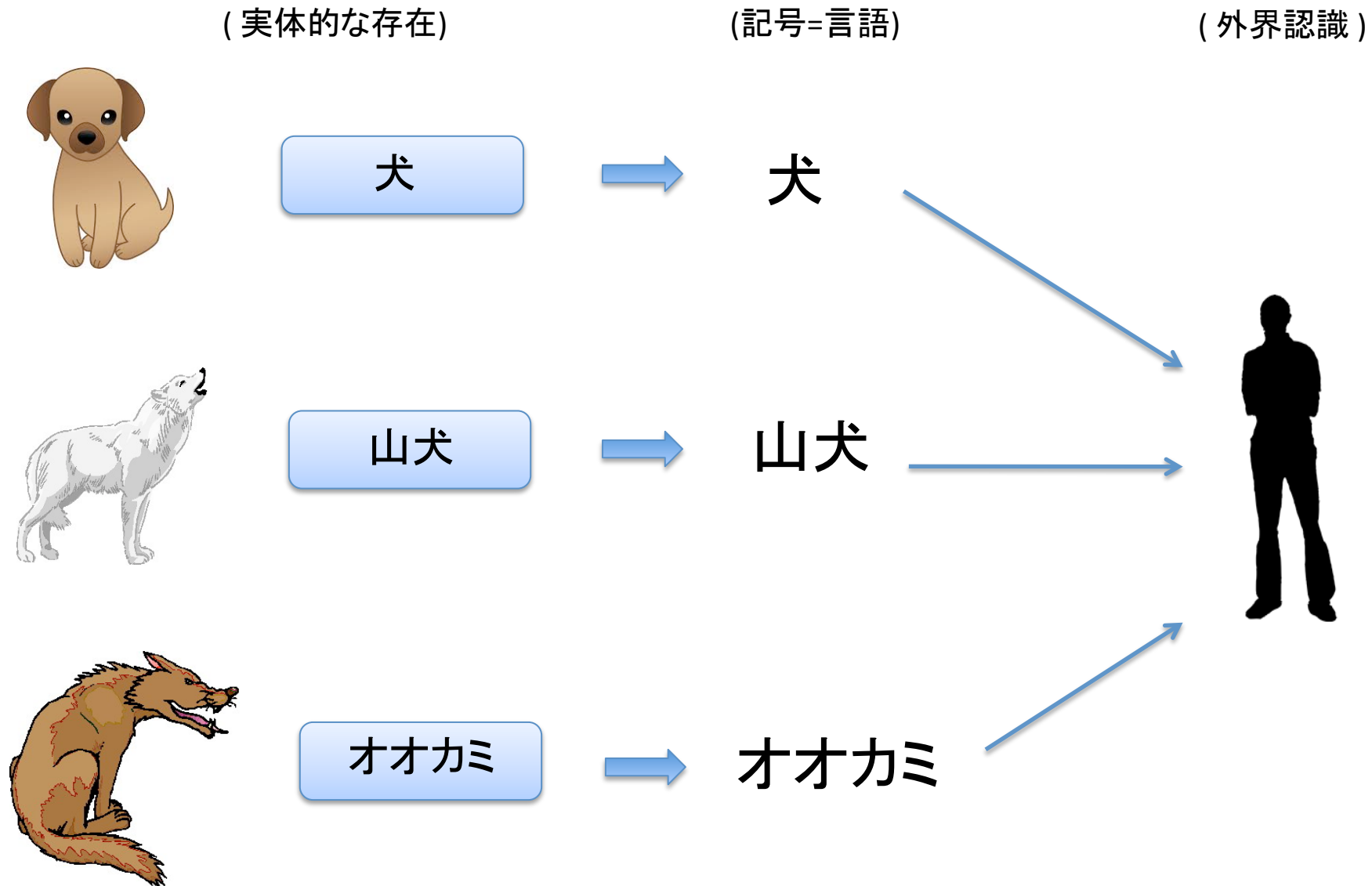
「言語名称目録観」

(実体論的な言語観)

# 「言語名称目録観」

ソシユール以前の外界認識モデル (実体論的な言語観)

最初に物などが存在する。  
人は物にラベルをつける。  
それによって外界を認識する



1910年ごろ以降

# ソシュール以後の考え方 「言語論的転回」

(関係論的な言語観)

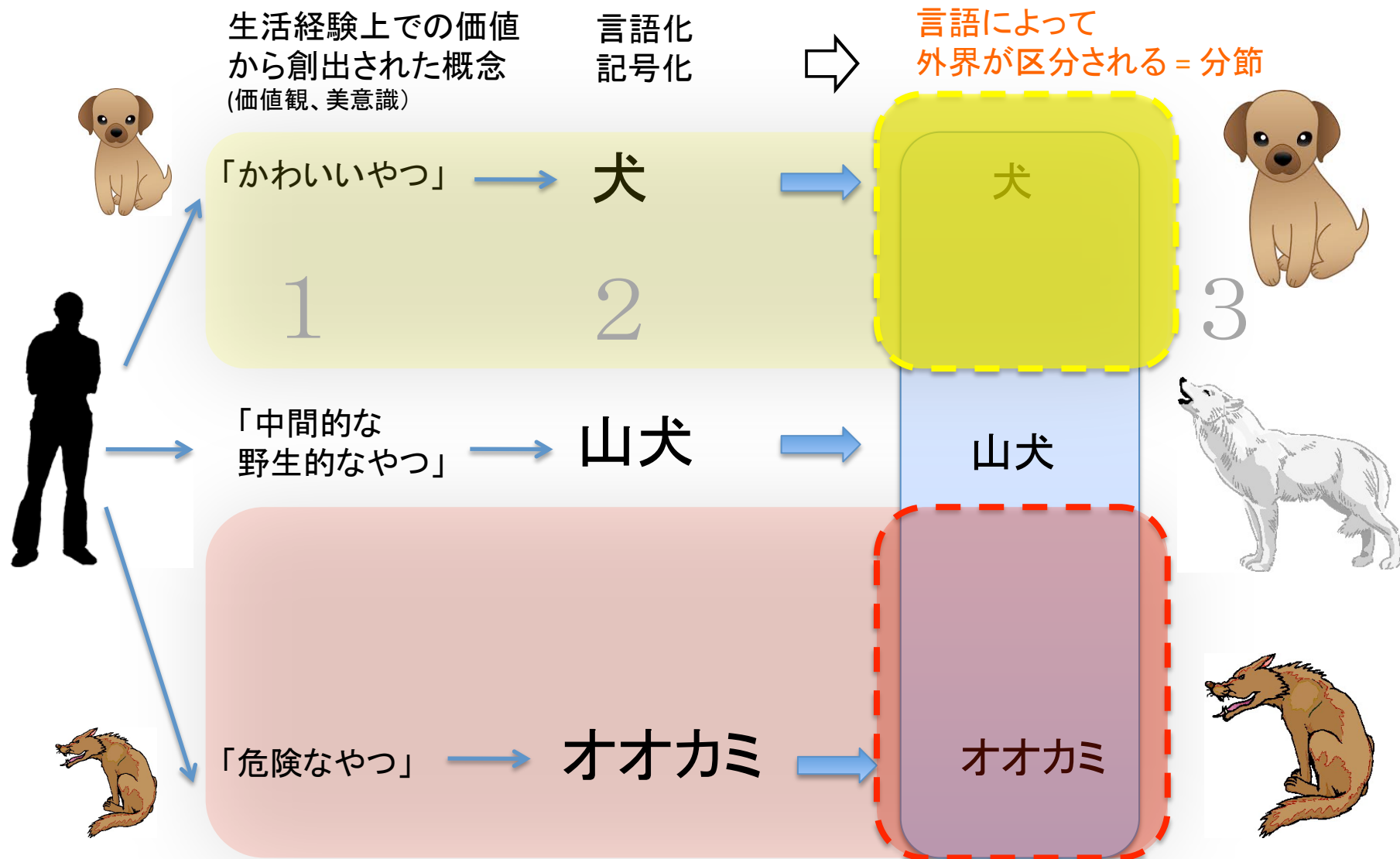
外界に存在する物事に対する命名によって言語がうまれたというよりも、  
むしろ、最初に言語ありきであり、言語こそが、人間にとっての外界認識をつくる、

という、世界認識方法の転回（20世紀はじめ＝ソシュールによる）

# 「言語論的転回」

ソシユール以後の外界認識モデル、記号論の視点（関係論的な言語観の契機）

人の価値観に基づいて  
本来は〈区分別のない〉外界を  
記号を用いて〈区分別する〉。  
そして外界を認識する。



言語は  
関係性（差異）のみによって  
成り立つ



表現記号  
シニフィアン

表現内容  
シニフィエ

言語 「犬」  
イヌ

と

これ



とのつながりは ?

まったく必然性はない (恣意的である) 。  
なぜなら、地域ごとに様々な〈つながり〉方が存在するから。

表現記号

dog (英) , chien (仏) , hund (独) , cane (伊) , собака (露)

ドッグ

シアン

フント

カーネ

サバーカ

表現内容



表現記号 (シニフィアン) と 表現内容 (シニフィエ) とのつながりは「恣意的」である。

## 音の差異

## 概念の差異

(関係論的な言語観)

「いす」×

「いと」×

「きぬ」×

「シニフィアン」  
記号表現

「いぬ」

「いに」×

「しぬ」×



これではなく



これ

「シニフィエ」  
記号内容



これでもなく

言葉においては  
「音」も「概念」も 他との関係による「差異」 によってしか示すことができない

「言語とは差異の体系である」

# 批評理論の概観

「テキスト主義」か、「コンテキスト主義」か？

または、作品の価値を判断すべきは

「作品自体」にか、「社会との関わり」にか？

## なぜ、〈文学〉の批評なのか ？

### 〈言語論的転回〉を無視できないため

- 〈記号〉が 外界の認識をつくるから
- 〈記号〉の中でも、〈言語〉が、十全にその機能を果たすから
- 「文化は言語である」（≠ 言語は文化である） 池上嘉彦 22頁。

「さまざまな文化的対象や現象の中で、言語が特権的な地位占めるものとして意識されている  
ということ —— つまり、『文化は言語（のようなもの）である』と捉えられうるということ ——  
は十分に明らかであろう」（池上嘉彦『記号論への招待』30頁。）。

# 「テキスト」と「コンテキスト」

## テキスト text

「なん人かによって そこから意味がよみとられることによって、一個の『表現体』」  
となるもの。  
(池上嘉彦『記号論への招待』29頁)。

「ある作品の本文。〔中略〕最近はとくに、作品 (work) という言葉があらかじめ作者を予想させるために、作品という語を避けて、より中立的な テキスト の語を使うことが多い」  
(川口喬ら「コンテキスト」『最新文学批評用語辞典』202頁)。

## コンテキスト context

「『文脈、前後関係、背景』の意」 (川口喬ら「コンテキスト」『最新文学批評用語辞典』202頁)。

# 文学批評史概観

## 「作品自体」か？ 「社会との関わり」か？

「テキスト主義」

「コンテキスト主義」

- ・ 19世紀末：英国ケンブリッジ大学に、大学史上初の「文学講座」ができる
- ・ 19世紀末：印象批評、道徳的批評、伝記的批評、マルクス主義批評（コンテキスト主義的）
- ・ 1910年頃：〈ロシア・フォルマリズム〉の批評（テキスト主義）ヨーロッパ
- ・ 1920年～50年頃：〈新批評〉（テキスト主義）アメリカ
- ・ 1950年～70年頃：〈構造主義批評〉、〈テクスト論〉の批評（テキスト主義）仏、米
- ・ 1970年～：〈受容理論〉、〈読者反応批評〉（コンテキスト主義）独
- ・ 1980年～：〈脱構築批評〉、〈精神分析批評〉（テキスト主義？ コンテキスト主義？）仏、米
- ・ 1990年～：〈新歴史主義批評〉、〈マルクス主義批評〉の系譜（コンテキスト主義）英、米

# 文学批評史概観

「作品自体」か？

「テキスト主義」

「社会との関わり」か？

「コンテキスト主義」

- ・ 19世紀末：英国ケンブリッジ大学に、大学史上初の「文学講座」ができる
- ・ 19世紀末：印象批評、道徳的批評、伝記的批評、マルクス主義批評（コンテキスト主義的）
- ・ 1910年頃：〈ロシア・フォルマリズム〉の批評（テキスト主義）ヨーロッパ
- ・ 1920年～50年頃：〈新批評〉（テキスト主義）アメリカ
- ・ 1950年～70年頃：〈構造主義批評〉、〈テクスト論〉の批評（テキスト主義）仏、米
- ・ 1970年～：〈受容理論〉、〈読者反応批評〉（コンテキスト主義）独
- ・ 1980年～：〈脱構築批評〉、〈精神分析批評〉（テキスト主義？ コンテキスト主義？）仏、米
- ・ 1990年～：〈新歴史主義批評〉、〈マルクス主義批評〉の系譜（コンテキスト主義）英、米

## 〈ロシア・フォルマリズム〉の批評 : 1910年頃～1920年頃

### 言語は新たな外界認識をつくる : 言語の「詩的機能」

#### 「テキスト主義」

- ・ 印象批評や道徳批評の 非科学的側面を批判
- ・ 「コンテキスト主義」を還元化
- ・ 言語の機能や技法にのみ着目 — ローマン・ヤコブソン ( 1896-1982 )
- ・ 〈異化効果〉 : 日常的な受容 ( 自動化 ) を避け、新たな受容をうながす言語表現  
例) 「 焰のつらら」、「四角い地球」、「ダイヤの溶解」

「対象を見慣れぬものにし、形式を複雑にし、知覚のプロセスをより長く困難にすること」  
シクロフスキー



〈新批評〉 new criticism : 1920年頃～1930年頃

## 作品それ自体を対象とした批評

### 「テキスト主義」

- ・ 作家の伝記的背景、社会的背景を考慮しない。
- ・ 純粹に、作品それのみを批評対象とする。
- ・ 「意図に関する誤謬」と「情動に関する誤謬」： 作者の意図や情動を排除
- ・ ウィムザット と ビアズリー が主唱者。 アメリカ南部文学から拡大する。
- ・ ただし人間が理性的に統一されたものとする前提にもとづいた批評（F、ジェイムソン）。1960年代以降の〈構造主義〉による主体性批判において疑問視される。

〈テクスト論〉： 1960年～70年代\_「作者の死」と「作品からテクストへ」

ロラン・バルト Roland Barthes (1915-1980、仏)

- 思想家、批評家。
- ソシュールの言語観を継承し、批評活動をおこなう。



画像: 土田知則ら『現代文学理論』20

〈テキスト論〉： 1960年～70年代 \_ 「作者の死」と「作品からテキストへ」

## ロラン・バルト『作者の死』(1968)

「〔作者が〕仮に自己を表現しようとしても、、、  
彼が《翻訳する》つもりでいる内面的な《もの》とは、  
それ自体、完全に合成された一冊の辞書にほかならず、  
その語彙は他の語彙を通して説明するしかない。  
それも無限にそうするしかない」(p.86)



→ 作者や作品が、脱中心化し、関係論的に認識されている

〈テキスト論〉： 1960年～70年代\_「作者の死」と「作品からテキストへ」

## ロラン・バルト『作者の死』(1968)



作者は、自己の創造性のみによって創作するものでもなく、したがって、自らの作品の意味を保証するような中心的・優先的な立場とはならない。

「テキストとは、無数にある文化の中心からやって来た引用の織物である」(pp.85-86)

「一編のテキストは、いくつかの文化からやって来る多元的なエクリチュールによって構成され、これら、、、は、互いに対話をおこない、他をパロディ化し、異議をとなえあう。

しかし、この多元性が収斂する場がある。その場とは、、、作者ではなく、読者である。読者とは、あるエクリチュールを構成するあらゆる引用が、一つも失われることなく記入される空間にほかならない。

あるテキストの統一性は、テキストの起源ではなく、テキストの宛て先にある」(p.88-89)

〈テキスト論〉 : 1960年～70年代 \_ 「作者の死」と「作品からテキストへ」

ロラン・バルト『作者の死』(1968)



「読者の誕生は、『作者』の死によって  
あがなわれなければならないのだ」 (p.89)

「作者」の中心性・優越性が失われ、一方で、  
「読者」こそが、作品から多様な意味を生み出さうとする場となる。

→ 「創造的読み」が許された読者の誕生。作品の創造に参加する「読者」。

〈テキスト論〉 : 1960年～70年代 \_ 「作者の死」と「作品からテキストへ」

ロラン・バルト 『作品からテキストへ』(1971)



〈テキスト論〉： 1960年～70年代 \_ 「作者の死」と「作品からテキストへ」

## ロラン・バルト 『作品からテキストへ』(1971)



作者が意味をつくる「作品」から、読者が意味をつくる「テキスト」へ

「作者は作品の父であり、所有者であると見なされる。  
それゆえ、、、文学の科学は、作者の原稿や表明された意図を尊重する」(p.99)

「『テキスト』は、その父親の保証がなくても読むことができる。、、、

『作者』が、、、自分のテキストの中に、《もどれ》ないということではない。  
ただ、そのときは、いわば招かれた客としてもどるのだ。

彼〔※＝作者〕の記名は、もはや特権的、父性的、真理論的なものではなく、  
遊戯的である。彼はいわば紙の作者になるのだ。彼の人生は、、、一個の創作となる」  
(p.100)

## 〈テキスト論〉： 1960年～70年代\_「作者の死」と「作品からテキストへ」

◀ 前へ 次へ ▶ 1 / 1件

### 物語の構造分析



モノガタリノコウゾウブンセキ

ロラン・バルト著, 花輪 光訳 (BARTHES, ROLAND.)

東京：みすず書房, 1987

[Amazon.co.jp](https://www.amazon.co.jp)で詳細を見る

この本に以下が収録

- ・「作者の死」
- ・「作品からテキストへ」

ブックマーク

● 所蔵：

|  | 巻号 | 刷年 | 所在    | 請求記号       | 資料ID   | 状況 | 予約・取寄                             | 予約人数 | 備考 |
|-------------------------------------------------------------------------------------|----|----|-------|------------|--------|----|-----------------------------------|------|----|
| 1 <input type="checkbox"/>                                                          |    |    | 相図：開架 | 954<br>B25 | 158313 |    | <input type="button" value="予約"/> | 0    |    |

全て選択

選択解除

巻号ブックマーク



ロラン・バルト「作者の死」(1968) 精読

以上